

# 投稿

## 伊勢原の大友皇子の陵の謎

島口 健次

伊勢原市の日向には、大友皇子の陵がある。大化の改新を行ったことで知られる天智天皇の皇子大友皇子は、皇位継承のことから、叔父の大海人皇子（後の天武天皇・第40代）と戦い、敗れて近江山前（さき）（滋賀県大津市）で自害した。所謂古代史最大の内乱の「壬申の乱」である。この時皇子は25歳であった。

ところが伝承によると、皇子は近江から逃れて、この日向の山中に隠れて住み、世を避け、詩歌風月を友として、その一生を送り、没後この古廟塚に埋葬されたというのである。この塚にある五輪塔は、平成15年の調査では、14世紀後半の南北朝時代に作られたものと判断された。神奈川県下では数少ない中世の層塔として、平成17年に市指定文化財となっている。

また、この皇子の陵近くには、石雲寺がある。寺の開創は寺伝によると養老2年（718）である。縁起によると華嚴妙瑞法師は紫雲に導かれるまま、この日向の谷に分け入り、亡き大友皇子の冥福を祈って寺を建立したとしている。寺には「真宗明覚大法王」と彫られた大友皇子の位牌が祀られている。また北条早雲の三男幻庵が、天文12年（1543年）に石雲寺に諸役を免除することを通達した文書も残されている。これは市内に現存する古文書では最古のものである。

なお、この大友皇子は幕末の“水戸学”の影響もあり、明治3年（1870年）明治天皇が弘文天皇（第39代）という諡号を贈り、歴代天皇に加わっている。

厚木歴史研究会では、講演会や史跡ウォークで啓発活動を行っている。